
ギルドマスターの悩み

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギルドマスターの悩み

【Nコード】

N7475P

【作者名】

Rail

【あらすじ】

闇の勢力が去った平和な時代、冒険者に仕事を割り振るギルドマスターの苦勞も昔とは変わってきているようで……？

王都の大通りにあるゾーイの店は、二百年以上前から続いている酒場だ。同時にそのゾーイの店は、王都一帯の冒険者のギルドの元締めも兼ねている。冒険者ギルドというのは、各地からの依頼を受け、その内容に見合った実力の冒険者が引き受けるというものだ。内容はモンスター退治や貴重な素材の探索など色々である。冒険者が依頼を達成すれば、それ相応の金額を冒険者に払う。

百年以上前のことだ。世界は魔の勢力に脅かされ、まさに暗黒時代だった。そんなときに各地に的確に冒険者を送り込み、魔の勢力の戦いに大いに貢献したのは三代目のゾーイだった。

現在九代目となったゾーイも、王都に限らず国中のギルドと手を組み、冒険者に仕事を振っている。とはいっても、今や泰平の世の中である。モンスターは未だいるものの、魔王も闇の帝王もない。かつてのギルドマスターにとって、冒険者が生きて帰ってくるか来ないかというのが最大の悩みだった。だが最近ではそうでもないらしい。

ゾーイの店は昼過ぎに開く。明るいうちは食堂として営業し、夜には酒場として営業する。

カウンターの内で、ゾーイは依頼書の束をめくっていた。髪は短く刈り込まれており、がっしりとした体つきだ。壮年のゾーイの頬には、大きな傷が付いている。昔モンスター退治に出かけたときに、たまたま現場に居合わせた子供をかばってできたものだ。衣服で隠れてはいるが、そんな傷が彼の体中にある。ゾーイの鋭い眼光で見られると、大抵の若い冒険者は震え上がる。現役の冒険者でないとはいえ、ギルドマスターを務めるには威厳と強さが必要なのだ。

昼下がり、青年の剣士がゾーイの店にやってきた。ゾーイは彼をじっと観察する。

革の鎧は傷一つついていない。使い込まれた様子はなく、買って間もないようだ。腰から下げた道具袋も真新しい。背負っている大剣は柄に装飾が施されていたが、遠目に見てもわかるほど安っぽいものだ。手にはタコができていたが、熟練の剣士の手とは程遠い。青年は大きな足音を響かせながらゾーイの方に向かってきた。なんともしまりのない身のこなしな上に、やる気はあるのだろうか。いまいちしまりのない顔である。冒険者としてはまだまったくの駆け出しだろう。その上技量も高いとは思えない。とてもではないが、大きい仕事は任せられそうにないとゾーイは結論付けた。

青年はカウンターに頼杖をつく、間延びした声で言った。

「マスター、俺え、仕事欲しいんですけど。なんかかつちよいいのないっすか」

癪に障るしゃべり方に、ゾーイの眉間にしわが寄る。しかしここで怒るのは大人げないと彼はぐっとこらえた。パラパラと依頼書をめくる。

「そうだな。お前さんならこれなんかどうだ。キリナの村長からの依頼だ。村はずれの廃墟の取り壊し。小型のモンスターが巣にしているらしいから、そいつらを退治しながらの仕事だ」

依頼書を青年に見せる。青年は大仰に驚いた仕草をした。

「マスター、冗談きついっすよお！ そんなかつたるい仕事やってらんないって。もつと派手でかつちよいい仕事くださいよ」

ひくりとゾーイの口の端がひきつる。かつたるいと青年に言われたこの仕事は、新人冒険者にはうってつけの仕事なのだ。新人は大抵こういった下積みを経験して現実というもの学んでいく。

「ほう。派手でかつちよいい仕事ねえ。具体的にはどういふのだ？」
皮肉っぽく言えば、青年はへらへらと笑った。自分の剣をこれ見よがしにいじる。

「決まってんじゃないっすかあ。悪いドラゴン倒して？ チョーか

わいいお姫様助けて？ 俺チヨーかつけえ勇者？ みたいな」

「おととい来やがれ」

青年の言葉を遮ったゾーイは言下に『素人向け冒険の心得』という本を青年の顔面めがけて投げつけた。ばしんと小気味よい音がする。青年はしばらく顔をのけぞらせたまま固まっていたが、やがてぶるぶると震えだした。

「てめえ、俺のこと馬鹿にしてんのかよ！」

「間違はなく馬鹿なんだよ！ 出てけ！」

腹の底から怒鳴れば、青年は真っ蒼な顔で酒場を飛び出していった。ゾーイはけつと小さくつぶやく。

カウンターに座っていたベテランの冒険者が笑う。

「ゾーイも大変だな」

他人事なので、実に気楽な調子である。

「今度あいつが来たら、お前と組んで仕事させるぞ」

苦々しげに言えば、ベテランの冒険者はわざとらしく体を震わせた。

「おお怖い怖い。あんな奴と組まれたんじゃ、命がいくつあっても足りないね」

けけけと人の悪い笑みを浮かべる冒険者に見切りをつけたゾーイはグラス磨きをすることにした。ベテランかつ常連ともなると、荒唐無稽な夢物語を語る冒険者を眺めてはにやにやと笑っているのだ。壮大な野望を持つのは悪いことではないとゾーイは思う。

ただ問題は、それを実行に移すための努力を一つ一つ積み重ねていくのか、努力を続けているのかということだ。最近は何故か自分に才能があると勘違いした拳句、努力という段階をすっ飛ばして成功を狙う浅はかな人間が後を絶たない。そしてそれは年々増えつつある。

ゾーイは頭痛がした。

と、入口の戸が勢いよく開いた。年若い青年が威勢よく飛び込んできく。小ぶりの槍をもった少年だ。やる気に満ちた目がきらきら

と輝いている。

こいつはちよつと期待できるかもしれない、とゾーイは思った。槍は鍛錬を積んでいるのか使い込まれているし、所作はきびきびとして無駄がない。いささか動作がオーバーであることが心配ではあったが、将来有望であることは間違いない。

「マスター、仕事はないか？」

カウンターに身を乗り出した青年はわくわくとした様子で言う。

「ほう、どんなだ？」

ゾーイが尋ねると、青年は真面目な顔をして言う。

「依頼を受けるのが初めてだからね。なるべく初心者向けのがいいな」

謙虚な言葉にゾーイは内心でにやりと笑った。こういう人間にはいい仕事を回したくなるのだ。

ゾーイは初心者向けの依頼書の束を引き寄せて青年に尋ねた。

「いろいろあるがね。どういったのがいい？」

青年はちよつと考えてからニツと笑った。

「悪いドラゴンからお姫様を助けるような仕事！」

依頼書をめくる手がぴたりと止まる。

しばしの沈黙の後、ゾーイは体を震わせた。浮上した気分を一気に奈落の底まで突き落とされた彼を、こらえきれない怒りが襲った。「帰れこの糞つたれ！」

そうして、今日もゾーイの店には怒声が響くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7475p/>

ギルドマスターの悩み

2010年12月27日02時25分発行